OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドビュッシーのメロディの世界
Author(s)	中村, 順子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57877
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【59】

氏　　　　　　名	中（なか）　村（むら）　順（じゅん）　子（こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学 位 記 番 号	第　２４０７１　号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 名	ドビュッシーのメロディの世界
論 文 審 査 委 員	(主査) 教　授　根岸　一美 (副査) 教　授　和田　章男　　准教授　伊東　信宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はドビュッシー（Claude Debussy, 1862-1918）が作曲した、フランス語で mélodie と呼ばれる歌曲のジャンルを取り上げ、様式の変遷を辿りつつ、その全体像と意義とを探った研究である。A４判 180 頁（多数の譜例を含む）からなり、大きく２つの部分から構成されている。

第１部ではメロディというジャンルを考察するための基本事項を整理し、研究への全体的な姿勢を述べている。その第１章では、第１節で、ドビュッシーの取り上げたロマン派から高踏派、象徴派の詩人及び時代背景について述べた後に、第２節では、主として本論文で扱うフランス詩の技法について述べている。次いで第２章では、まず第１節において、詩に基づいて芸術歌曲を作曲することについての先行研究として、シュレゼールと新田博衛の論考を取り上げつつ、ドビュッシーのメロディに向かうためには、これらの論における問題提起の留意すべきところを押さえておきながらも、加えて生き生きと展開する演奏の要素を考慮し、詩の音楽化（mettre en musique）を明確に把握する必要があると説く。それを受けて第２節では、詩から演奏に至るまでの音楽化の実際について考察し、書かれた詩（原詩）から演奏における歌詞（歌のことば）にはかなりの隔たりがあること、そして、もとより、原詩と、楽譜から読み取られる書かれた歌詞（テキスト）との間にも差異があることを確認する。こうして、原詩から音楽への過程における諸段階を辿りつつ、第２部における歌曲分析の方法論の基本姿勢を明示している。

第２部はこの論文の中心となる部分であり、第３章では、作曲家の全生涯にわたるメロディ創作を概観し、時代区分を行い、第４章では、この時代区分に沿って、楽曲の分析と考察を行っている。以上の結果として、第Ⅰ期（1879～1885 年）では、ドビュッシーが、詩の形式を考慮して音楽の形式を使っており、テキストの意味内容に合わせて、伝統的な音楽の形式を応用的に扱い、意味に向かって詩行・詩節といった詩の形式の枠を崩そうとするような作曲をしていること、第Ⅱ期（1887～1893 年）の最初の作品となったヴェルレーヌに基づく歌曲集ならびにそれ以降のメロディでは、詩行と詩節の枠組みをほとんどすべて崩してひとつながりにする音楽化が見られること、第Ⅲ期（1893～1898 年）では、韻文の定型的な形式を崩した詩を好んでテキストにしていること、第Ⅳ期（1903～1904 年）では、再びヴェルレーヌに向かい、この詩人に基づく歌曲集に集中していること、そして最後の第Ⅵ期（1913～1915 年）では、これまで見られた歌とピアノの手法を自在に使って「軽み」の境地に達していること、を考察の成果として述べている。なお、第Ⅴ期（1904～1910 年）については、ドルレアンやレルミットといった 15、17 世紀の古い詩人を扱っており、基本的に 19 世紀ないし同時代の詩に基づくドビュッシーの歌曲の流れにおいては特殊なグループを形成しているとして、本論文では、この時期に属する作品は分析の対象外としている。

論文審査の結果の要旨

ドビュッシーは数々のピアノ曲や管弦楽作品などで知られるが、歌曲の分野にもかなりの力を注ぎ、90 曲以上もの作品を書いている。これらはドイツ歌曲ほどには演奏される機会は多くないとはいえ、フランス歌曲の演奏会において、重要なレパートリーを形成している。しかし、今までのドビュッシー研究においてもフランス歌曲研究においても、多くのことは語られなかった。本論文は、このような状況把握のもとに、ドビュッシーのメロディに光をあて、ジャンル形成の歩みを地道な楽曲分析を通じて明らかにしようとした労作である。原詩から楽曲への道筋を辿るという本旨に対応し、自身による詩の翻訳ならびに韻律等の分析を行うことから論を展開しており、詩の研究と音楽学研究とを一体化させていることも特筆に値する点である。

本論文に関する口頭試問は 2010 年１月 12 日（火）、およそ１時間 30 分にわたって実施した。そこでは、１）ドビュッシーのメロディを論じるにあたっては、同じく声楽作品であり、重要作であるオペラ《ペレアスとメリザンド》についての考察が、少なくとも研究史の観点からは必要ではないか、２）ドビュッシーの歌曲の考察にあたって、オング（W. Ong）による＜声に出されたもの＞/＜書かれたもの＞という概念の援用は当てはまらないのではないか、などの指摘が行われ、３）詩や作品中のフランス語の理解についても、いくつかの問題点が示され、また指摘が行われた。しかし、これらに対してはいずれも的確な解答ならびに理解が示され、ドビュッシーの歌曲の世界について、さらに、19 世紀のフランスの詩と歌曲について、論文提出者が、幅広い知見を有していることが証示された。とりわけ、個々の作品の分析は、一つ一つの曲への共感にあふれた丁寧かつ誠実な取り組みとなっており、過不足なく明快に記述されており、作品の鑑賞に際しても十分に活用されうるものとなっている。以上の成果により、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。